Sonoda Women's University

園田学園女子大学論文集　第40号（2006.1）

# カリブ海、セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国セント・ヴィンセント島における小型鯨類捕鯨

## ――その歴史、現況および課題について――[1)]

浜　口　　尚

### 1. はじめに

セント・ヴィンセント島はカリブ海、小アンチル諸島の南半分からなるウィンドワード諸島の一角を占め、北緯13度7分から13度23分、西経61度7分から61度17分に位置する面積345㎢、人口9万9000人（1991年）の島である。このセント・ヴィンセント島およびそこから南に連なる30余りの島々、グレナディーン諸島が一つの独立国「セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島」（St. Vincent and the Grenadines）を構成している。

セント・ヴィンセント島においては首都キングスタウンの北西約19.3km、風下側海岸のほぼ中央部に位置する漁村バルリー（Barrouallie）でコビレゴンドウを主対象とする小型鯨類捕鯨が行われている［図1］。

本稿においては、まずバルリーにおける小型鯨類捕鯨の歴史を文献資料に依拠して概括し、次に最新情報に基づいて捕鯨の現況を報告する。そしてその結果を踏まえたうえで小型鯨類の管理にかかる課題を考察する。

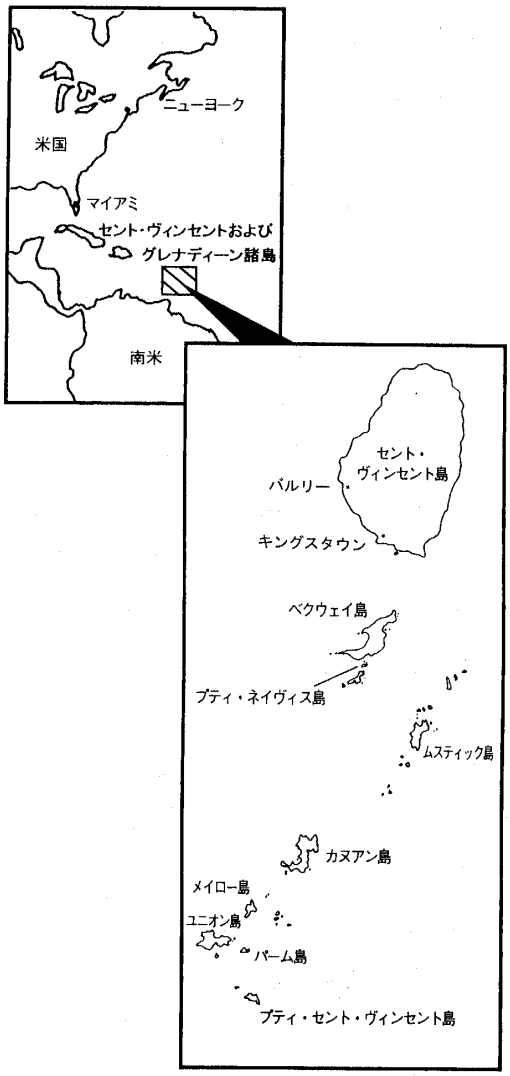


図1　セント・ヴィンセント島周辺図



NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

## 2．捕鯨の歴史

本節においては文献資料に基づいて1980年代初めまでのバルリーにおける捕鯨の姿を概括する。用いた資料はラスジェンとサリヴァンの1967年の調査［Rathjen and Sullivan 1970］、アダムスの1966年および1970年代初めの調査［Adams 1971, 1975］、コールドウェル夫妻の1968年から1974年にかけての調査［Caldwell and Caldwell 1975］、プライスの1980年代初めの調査［Price 1985］である。

バルリーでの小型鯨類捕鯨は1910年頃に始まった［Price 1985:415］。1910年頃はセント・ヴィンセント島の南14.5kmに位置するベクウェイ島をはじめとするグレナディーン諸島におけるザトウクジラ捕鯨の絶頂期にあたっており、あるいはその影響を受けたのかもしれない。

バルリーで使用されてきた捕鯨ボートは全長20～24フィート（6.1～7.3m）、元々は手漕ぎで帆推進、5人程度のクルーが乗り、手投げ銛、ヤスで小型鯨類を捕獲した［Price 1985:415］。

1962年にショット・ガンの銃身の一部を切断、改造した銛撃銃が捕鯨ボートの舳先に据え付けられ、手投げ銛に取って替わった［Rathjen and Sullivan 1970:136-137, Price 1985:415］。1968年に1隻の捕鯨ボートがエンジン動力船に転換され、1972年までに全ての捕鯨ボートがエンジン動力船となった［Caldwell and Caldwell 1975:1106］。この動力化によりクルー1人を減じることが可能となった［Caldwell and Caldwell 1975:1106］。

セント・ヴィンセント島の風下側海岸から沖合24kmまでが漁場で、日曜・祝日、悪天候の日を除いてほとんど毎日出漁していた［Price 1985:417］。コビレゴンドウは年間を通して捕獲されてきたが、ラスジェンとサリヴァンは6月から9月にかけて最も多く捕獲されていたとし［Rathjen and Sullivan 1970:135］、一方プライスによる1978年から1983年までの捕獲統計によれば8月から10月に捕獲が集中していた（全体の65%）［Price 1985:417］。

1962年から1969年までの8年間にコビレゴンドウは2135頭（年間平均267頭）捕獲され［Caldwell and Caldwell 1975:1106］、1970年から1979年までの10年間は1171頭（年間平均117頭）となり［Caldwell and Caldwell 1975:1106, Price 1985:416］、1970年代の捕獲数は1960年代の半数以下となった。

捕鯨ボート数も1955年15隻、1968年12隻、1973年4隻と減少し、1978年から1983年までは2～3隻を推移していた［Price 1985:416-417］。

1970年代以降のコビレゴンドウ捕鯨の衰退原因について、コールドウェル夫妻は漁民の捕鯨への関心の減少、修繕費および補給品（弾薬、ロープ、帆など）の経費増大、燃料費の高騰、米国での「海洋哺乳類保護法」（1972年）の制定が複合したものとしている［Caldwell and Caldwell 1975:1106］。

捕獲されたコビレゴンドウはバルリーの浜で仲買人に売却され、また一部は地元民に自家消費用として販売された。仲買人はそのコビレゴンドウを生肉のまま、あるいは塩漬け後、天日干し



NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

にして首都キングスタウンにある水産市場に出荷した［Price 1985:416］。塩漬け後、天日干しにされたコビレゴンドウ肉は、熱帯という悪条件下でも冷蔵せずに1週間以上はもち、セント・ヴィンセント島における最も安い動物性タンパク質源の一つとなっていた［Rathjen and Sullivan 1970:136, Adams 1971:72］。

かつては脳油が機械類の優れた潤滑油として米国に輸出されていたが、米国での海洋哺乳類保護法制定の結果、輸出が不可能となり、現金収入の道の一つが断たれた［Caldwell and Caldwell 1975:1106］。脂皮から精製される鯨油も同様で、もはや収入源ではなく、食用油として地域的に消費されるにすぎなくなった［Caldwell and Caldwell 1975:1106, Price 1985:416］。

コビレゴンドウに加えて、ハシナガイルカやタイセイヨウマダライルカなどのボートの舳先につくイルカ類も手投げ銛で捕獲、キングスタウンの水産市場に出荷されており［Caldwell and Caldwell 1975:1109］、イルカ類も島民の食料の一つとなっていた。

以上が1980年代初めまでのバルリーにおける小型鯨類捕鯨の概括である。

## 3．捕鯨の現況

### 3.1. 小型鯨類の利用と流通

2003年8月現在、バルリーでは3隻の捕鯨ボートが稼動中、1隻が修理中であった（1997年3月、2000年8月、2001年3月は4隻稼動中）。1隻に2～3人が乗り組む。

1990年以降、銛撃銃を装備した捕鯨ボートで銛手（銃撃手）として捕鯨に従事しているAさん（1963年生）によると、捕鯨は1月から12月のクリスマス前まで行われており、ほぼ通年操業である。月曜日から土曜日までは毎日出漁、日曜日は教会のミサに出席するために休漁、祭日はその時々の状況による。

毎朝7時に浜に集まり出漁の準備をし、8時頃に出港する。捕鯨はセント・ヴィンセント島の風下側海岸沖で行われる。捕獲がなければ午後2～3時頃帰港する。鯨類を追跡して遅くなった時には帰港が夜11時頃になる場合もある。

Aさんの捕鯨ボートは全長21フィート（6.4m）、幅6フィート（1.8m）、ヤマハのガソリン船外機を装備し、銛手（harpooner）、作業人（working man）、キャプテン（captain）の3人が乗り組む。銛手が舳先で全体の指揮を取り、キャプテンが艫で船外機の操作を担当、作業人は船上で各種道具の準備や保守など諸々の雑用に従事する。海上では3人全員で探鯨する。

捕鯨ボートの舳先に固定式の台座があり、そこに取り外し可能な銛撃銃を装備、その銛撃銃から鉄製の銛を発射する［写真1］。鉄製銛はロープに繋がれており、ロープの先にはブイが取りつけられている。捕鯨ボートには鉄製銛9～10本、手投げ銛3本、ヤス2本、ブイ3個が準備されている。

コビレゴンドウが主たる捕獲対象で、各種イルカ類も捕獲する。以下にAさんの捕獲数一覧を掲げておく［表1］。表1はAさんだけの捕獲数であり、他の3隻の捕獲数についてはまだ情報



NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

を入手していない。Aさんによれば他の3隻を合わせても捕獲数は彼の半分程度とのことであった。

当地の捕鯨は「シェアー・システム」(share system) によって利益配分がなされている。具体的な配分法は以下のとおりである。

まず、売上から燃料費（ガソリン代）を差し引く。残りが収益となる。次に収益を2等分し、半分がボート所有者の取分となる。但し、そのうちの10%はキャプテンの取分である。さらに残りの半分を銛手、作業人、キャプテン、船外機（エンジン）所有者で4等分する。

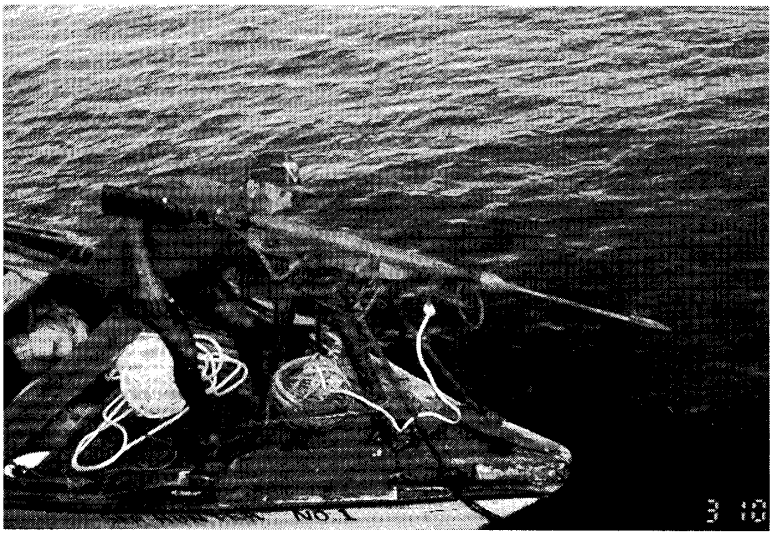

写真1　銛撃銃

表1　バルリーにおける小型鯨類捕獲数（部分集計）

| | 2000 | 2001 | 2002 | 2003* |
|---|---|---|---|---|
| コビレゴンドウ | 70 | 100 | 91 | 45 |
| オキゴンドウ | 25 | 31 | 10 | 6 |
| シャチ | 4 | 6 | 0 | 6 |
| イルカ類 | 350 | 366 | 301 | 271 |

(*) 2003年は8月17日までの記録
［出典: Aさんの記録ノート］

船外機の導入により1～2名のクルーの削減が可能となった。その削減されたクルーのかわりに仕事をするのが船外機なので、船外機にも1人分の利益配分がある。

Aさんは捕鯨ボートおよび船外機の所有者でもあるので、彼の取分は捕鯨ボート分（45%）、銛手分（12.5%）、船外機分（12.5%）を合計したものとなり、利益全体の70%である。キャプテンの取分は17.5%、作業人の取分は12.5%である。

捕獲に成功すれば銛手・ボート所有者・船外機所有者としてのAさんの取分は多くなるが、捕鯨ボート、船外機、各種捕鯨道具の購入費および維持管理費は彼の負担であるので、それを償却していく必要もある。捕獲がなければ、当然負担も大きくなる。取分の多さと損失の多さは紙一重なのである。

捕獲されたコビレゴンドウ、イルカ類は丸ごと仲買人に売却され、仲買人が解体、首都キングスタウンの水産市場に卸す。また、直接地元民に販売されることもある。

2003年現在、バルリーには仲買人が9人いる。Aさんは鯨類を仲買人全員に順番に売却する。



NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

1頭丸ごと売却するが、頭部は歯を取るために切り落とす。シャチの場合、歯は1本40ECドル（1800円）[2)]で土産物として販売する。

仲買人への売渡し価格は鯨種や性別、大きさによって異なっている。以下が小型鯨類の仲買人への売渡し価格である。

シャチ：オス3000～4000ECドル（13万5000～18万円）、メス2500ECドル（11万2500円）
コビレゴンドウ、オキゴンドウ：オス1200～1500ECドル（5万4000～6万7500円）
メス750～1000ECドル（3万3750～4万5000円）
大きなイルカ類（カズハゴンドウなど）：250～500ECドル（1万1250～2万2500円）
小さなイルカ類：120～150ECドル（5400～6750円）

コビレゴンドウが小さい場合やイルカ類の場合は地元民の求めに応じて解体して販売する場合もある。バルリーの浜で解体した場合の販売価格は次のとおりである。

コビレゴンドウ：1ポンド、3ECドル（135円/lb、297円/kg）
イルカ類：1ポンド、2ECドル（90円/lb、198円/kg）

1998年3月、キングスタウンの水産市場に生イルカ肉が並べられていたので、販売者に尋ねたところ、イルカ肉はバルリーの仲買人から1ポンド、1.5ECドル（68円）で仕入れ、2.5ECドル（113円）で販売するとのことであった。

2003年8月、キングスタウンの水産市場における鯨産物の販売価格は下記のとおりで［写真2］、生イルカ肉の販売価格は1998年以降変わっていない。

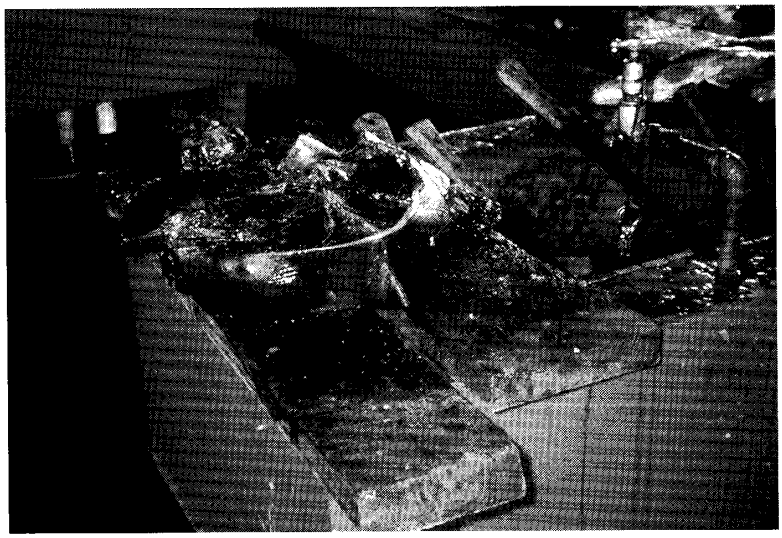

**写真2　イルカ肉の販売風景**

生イルカ肉：1ポンド、2.5ECドル（113円/lb、248円/kg）
干イルカ肉：1ポンド、1.5ECドル（68円/lb、149円/kg）
生脂皮：1ポンド、1ECドル（45円/lb、99円/kg）



NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

参考までに他の動物性タンパク質源の販売価格を以下に記しておく（魚類は水産市場、肉類はスーパー・マーケットの価格である）。

サワラ、シイラ、マハタ、フエダイ：1ポンド、5～6ECドル（225～270円/lb、496～595円/kg）
キハダマグロ、タイセイヨウマグロ：1ポンド、3～4ECドル（135～180円/lb、297～396円/kg）
ムロアジ、メアジ：1ポンド、2～3ECドル（90～135円/lb、198～297円/kg）

サー・ロイン：1ポンド、10.78ECドル（485円/lb、1069円/kg）
シチュー用細切れ牛肉：1ポンド、5ECドル（225円/lb、496円/kg）

ポーク・ロースト：1ポンド、6ECドル（270円/lb、595円/kg）
シチュー用豚肉：1ポンド、5.75ECドル（259円/lb、570円/kg）

鶏肉（手羽先）：1ポンド、1.65ECドル（74円/lb、164円/kg）

上記のとおりイルカ肉は牛肉や豚肉のみならず魚よりも安く、島民の貴重な動物性タンパク質源の一つになっていることが窺い知れた。

### 3.2. 小型鯨類の管理

島民の貴重な動物性タンパク質源の一つとなっている小型鯨類であるが、セント・ヴィンセント国においては小型鯨類の捕獲に関する法規制はない。2003年8月に面談した同国水産局長によれば小型鯨類は国際捕鯨取締条約の規制対象外であるので、同国においては小型鯨類の法規制への優先順位は低いとのことであった。言い換えれば、当面法規制の予定はないということである。国際捕鯨取締条約において先住民生存捕鯨として容認され、年間4頭の捕獲割当が与えられている同国ベクウェイ島でのザトウクジラ捕鯨に関して、2003年にセント・ヴィンセント国が管理規則を法制化したのとは大きな違いである[3)]。

管理せずに資源を持続的に利用していけるのであるならば、それはそれでよい。しかしながら、管理なしの持続的利用は結果としていえる（いえた）ものであり、将来の持続的利用を保障するものではない。

現状から将来を考えるにはそれなりの資料、少なくとも捕獲統計は必要である。では、セント・ヴィンセント国の小型鯨類に関する捕獲統計はどうなっているのであろうか。2003年8月、同国水産局で統計担当係官と面談し、1999年から2001年までの3年間の捕獲記録（月別捕獲重量、販売金額）を入手した。

コビレゴンドウに関しては係官が精度20%程度という資料であるので資源管理用の基礎資料と



NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

しては使えないであろう（それゆえ、本稿においては取り上げない）。イルカ類については精度80～90%としているのでそれなりに使えるかもしれない。セント・ヴィンセント国水産局によるイルカ類の捕獲記録は以下のとおりある。

セント・ヴィンセント国イルカ類捕獲量

1999年：1万4524ポンド（6594kg）

2000年：1万7579ポンド（7981kg）

2001年：1万6538ポンド（7508kg）

3年間の平均：1万6214ポンド（7361kg）

この数字を過去の捕獲統計と比較してみよう。残念ながら過去においても捕獲統計は不完全である。コールドウェル夫妻の調査によれば、1972年（8か月分）のイルカ類の捕獲量は1万2325ポンド（5596kg）であった［Caldwell and Caldwell 1975:1109］。単純に12か月に割り戻せば1万8488ポンド（8494kg）となる。

1973年の捕鯨ボート数は4隻［Price 1985:416］、2000年と2001年も4隻であるので、漁獲努力をほぼ同じと想定したならば、30年前と比較すればイルカ類の捕獲量は幾分減少しているといえるかもしれない。これが資源の動向とどのようにかかわっているのかは不明である。

次にコビレゴンドウの資源状況について考えてみる。文献資料によれば脳油、鯨油が輸出されていた1962～1969年の年間平均捕獲数は267頭［Caldwell and Caldwell 1975:1106］、1968年の捕鯨ボート数は12隻［Price 1985:416］であった。これに対して脳油、鯨油の輸出が不可能となった1973年以降1983年までの捕鯨ボート数は2～4隻で推移し、また1970～1979年のコビレゴンドウの年間平均捕獲数は117頭であった［Caldwell and Caldwell 1975:1106、Price 1985:416］。これらの事実から「117頭」「4隻」という数字を食料としてセント・ヴィンセント国内で消費されるコビレゴンドウ数およびその捕獲に必要な捕鯨ボート数と考えてもよいであろう。

筆者の調査では1997年、2000年、2001年、2003年の捕鯨ボート数は4隻、コビレゴンドウの捕獲数もAさんの推定（他の3隻で彼の半分程度）が正しいとするならば、バルリー全体では130頭程度となる[4)]。

20、30年前と比較すれば、コビレゴンドウの捕獲数は年間10数頭増加している。その間、捕鯨ボート数は4隻程度であったので、年間捕獲数10数頭の増加は、漁獲努力をほぼ同じと想定したならば、資源量の増加によるといえるかもしれないが、確かなことはいえない。

結局のところ、正確な統計資料がないので、小型鯨類の捕獲に関しては、コビレゴンドウであれイルカ類であれ大雑把なことしかいえないのである。



NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

## 4．おわりに

セント・ヴィンセント国において大型鯨類のザトウクジラの捕獲に関しては2003年に管理規則が制定された。しかしながら、その規則は生物資源学上の必要性から制定されたものではなく、反捕鯨国向けの政治的理由から制定されたものである。科学的根拠に基づかないこの種の管理規則は鯨捕りたちにトラブルの種をもたらすだけであることは別所で指摘しておいた[5)]。

一方、同国において小型鯨類の捕獲に関しては管理規則はなく、当面制定される予定もない。コビレゴンドウやイルカ類はセント・ヴィンセント島民にとって貴重な動物性タンパク質源の一つとなっていることは先にみたとおりである。これらの小型鯨類資源を持続的に利用していくためには何らかの資源管理策が必要であり、そのためには資源管理策策定の基礎となる正確な統計資料が不可欠である。

限られた人員の中で水産政策の実施に苦心しているセント・ヴィンセント国水産局の現状は筆者もよく理解している。直接現在の事業に関係しない統計に予算をそれほど割けない事情もわかる。しかしながら、将来において食料資源の一つを持続的、安定的に供給していくためには、小型鯨類の捕獲に関する正確な統計資料が早急に整備されるべきであることは言を俟たない。このことを再度強調して本稿を終えたい。

### 注

1）本稿は平成15年度国立民族学博物館共同研究「先住民による水産資源の分配と商業流通」（研究代表者・岸上伸啓国立民族学博物館助教授）の第4回共同研究会（2003年11月15-16日）における筆者の発表「セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国における鯨類資源の利用、管理、流通について」の一部に基づくものである。また、本稿にかかる2003 年の現地調査は同年8月に平成15年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究A（1）課題番号15251012「先住民による海洋資源の流通と管理」研究代表者・岸上伸啓国立民族学博物館助教授）を受けて実施したものである。

2）1EC（East Caribbean）ドル、約45円。

3）ベクウェイ島におけるザトウクジラ捕鯨の概要については浜口［1998, 2001］、Hamaguchi［2001］を参照のこと。

4）2000～2002年までの3年間のAさんの捕獲数合計261頭、年間平均87頭。他の3隻の年間捕獲数をAさんの半分と想定すれば44頭。バルリー全体では、年間131頭。

5）セント・ヴィンセント国におけるザトウクジラ捕鯨にかかる管理規則制定の経緯およびその問題点については浜口［2003, 2004］を参照のこと。

### 参考文献

Adams, John E.

1971 Historical Geography of Whaling in Bequia Island, West Indies. *Caribbean Studies* 11(3):55-74.

1975 Primitive Whaling in the West Indies. *Sea Frontiers* 21:303-313.

Caldwell, David K. and Melba C. Caldwell

1975 Dolphin and Small Whale Fisheries of the Caribbean and West Indies: Occurrence, History and Catch Statistics — with Special Reference to the Lesser Antillean Island of St. Vincent. *Journal*



NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

*of the Fisheries Research Board of Canada* 32:1105-1110.

浜口 尚

1998「絶滅の危機を救った捕鯨ボート『レスキュー』－カリブ海、ベクウェイ島の捕鯨の現在－」『鯨研通信』400:12-20.

2001「カリブ海、ベクウェイ島における捕鯨と観光」石森秀三・真板昭夫編『エコツーリズムの総合的研究』(国立民族学博物館調査報告23号)、163-179頁。

2003「セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国ベクウェイ島におけるザトウクジラ資源の利用と管理」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』(国立民族学博物館調査報告46号)、401-417頁。

2004「カリブ海、セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国ベクウェイ島のザトウクジラ捕鯨－2003年の2大変化をめぐって－」、『和歌山地理』24:1-8.

Hamaguchi, Hisashi

2001 Bequia Whaling Revisited: To the Memory of the Late Mr. Athneal Ollivierre, *Sonoda Journal* 36:41-57.

Price, William S.

1985 Whaling in the Caribbean: Historical Perspective and Update. *Report of the International Whaling Commission* 35:413-420.

Rathjen, W.F. and J.R. Sullivan

1970 West Indies Whaling. *Sea Frontiers* 16:130-137.

---

〔はまぐち　ひさし　文化人類学〕



NII-Electronic Library Service